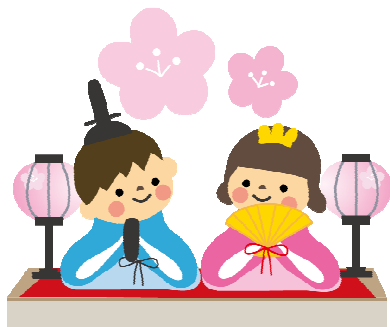


# ほっと通信



平成23年度も残りあと1か月となりました。  
新しい学級や新しい学校に胸を膨らませ、とき  
どきしながら迎えた4月が懐かしく、また、あと  
少しでそんな4月を迎えようとしています。

## クラス全体を見渡した支援

今年度、特別支援教育担当の巡回相談は、2月末日現在で約700回実施致しました。

巡回相談は、平成19年度から始まり今年で6年目となりますが、年々相談件数が増えてきています。これは、気になる子どもが増えてきたということではなく、日々、指導に携わっている先生方が子どもたちからのサインに気づき、ヘルプを出して下さるようになったからだと思います。

担任の先生一人で抱え込まず、校内や外部機関に支援を求めてくださることは、様々な視点で子どもを捉えて、サポートしていくことにもつながります。今後とも連携を深め、子どもたちが充実した学校生活を送っていただけるよう、先生方へお力添えをしていきたいと思っております。

また、今年度の巡回相談を通して感じられるのは、「どうしたらいいですか?」という漠然とした相談が少なくなり、代わりに「こんな支援をしているが、それでいいのか見てほしい」「こんな支援を試みたがうまく行かなかった」というような、一歩踏み込んだ状況で連絡を下さる学校が増えてきたということです。各学校の特別支援教育が、それぞれの学校のカラーで深まってきているのを感じます。

しかし、子ども一人一人の個性は異なり、なかなか支援が進まない場合もまだまだあります。特別支援教育というと、ややもすると「“個”に応じた“特別な”支援」をしなくてはならない、といった思いをもたれる先生方もいらっしゃいます。ところが、特別な支援を必要とする子どもは何十年前からいたわけですから、いままで先生方が行っていた支援を整理したもの、体系化したものを「特別支援教育」と呼ぶと考えると、支援に対する気負いが少し軽くなるのかもしれませんが。

さて今回は、そんな“個に応じた”特別支援教育ではなく、クラス全体を見渡した支援を中心に考えていきたいと思っております。あと1か月の今の学級経営に、また来年度の新しい学級経営の参考にしていただけたら嬉しいです。



## 学習環境を見直そう

みなさんは映画を観に行きますか？

家庭でのDVD鑑賞もいいですが、映画館で観ると臨場感があっていいものですね。

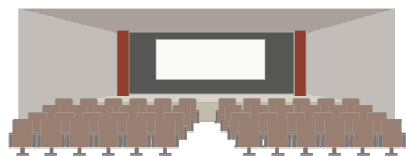
ところで、映画館での上映時間は、たいてい120分くらいですが、普段、そんなに長い時間、同じ椅子に座って何かに集中し続けることができるでしょうか。同じ作品でも、映画館で見る時と、DVDを家庭で見る時では違ってきます。

## 2時間も椅子に座ってられる映画館

上映中は、ほとんどの人が一度も席を立たずに椅子に座って映画に集中しています。

なぜ、映画館なら2時間も一つのことに集中し続けることができるのでしょうか？

例えば、場内が真っ暗でスクリーンしか見えないという状況は、スクリーンだけに注目することができるようになっていいると考えることができます。また、売店で売っているお菓子がせんべいではなく、ポップコーンであるのは、食べた時に大きな音が立たないからと考えることができます。そのほかにも、観客の集中力を高めるためにどのような工夫がなされているのか、観客の「興味・関心」、館内の「ルール」、「環境調整」といった点から考えてみると、下に挙げた様々な工夫がされていることに気がきます。



### 環境調整

- ・室内が暗いのでスクリーンに注目できる
- ・座り心地の良い椅子
- ・自分にとって見やすい席を選択できる
- ・立ち上がりにくい横並びの席
- ・階段状になって、前が見えやすい座席配置
- ・聞き取りやすい音響設備
- ・ストロー付きドリンク
- ・せんべいでなくポップコーンが売られている
- ・事前にパンフレットで内容を把握できる

### ルールの存在・確認

- ・開始5分前には着席を促す  
アナウンスが流れる
- ・毎回流れるマナーモード推奨映像
- ・入り口に携帯電話電源オフの看板

### 興味・関心

- ・封切前にテレビや雑誌で予告版が流れる
- ・話題の作品である
- ・最新のコンピューターグラフィック技術が見られる
- ・好きな俳優が出ている

## 学習環境の参考にしましょう

子どもの集中が続く時間などが考慮され、毎日の授業の1単位時間は45～50分になっています。しかし、そのように計算された授業時間であっても、なかには気が散りやすかったり、ボーっとしてしまったりと、集中することが苦手な子どももいます。

そういった子どもたちが、少しでも授業に集中できるように、何か工夫できることはないでしょうか？ 映画館での工夫からヒントを得て考えてみましょう。

### 環境調整



- ・教室前方の掲示物は極力減らす。なくす
- ・それぞれの子どもの特性に合わせた座席の位置
- ・椅子や机の高さを調整する
- ・テニスボールやクッション材を用い、音が出ないようにする
- ・机の中には学習道具だけを入れるようにする
- ・机上に置く道具は必要最小限にする
- ・指示の声の強弱やトーンの高低を使い分ける
- ・今日のめあてや予定をあらかじめ示す

⇒授業に集中できるように、刺激となるものを減らす。整える

### ルールの存在・確認



- ・授業前にルールを再確認する
- ・「挙手し、指名されたら発言する」  
「先生が話す時は手を止め、前を見る」というルールを徹底する
- ・「〇分までに」など、時計を有効利用する
- ・守れて当然のことだとしても、  
できるようになるまでは丁寧に褒める

⇒暗黙の了解と思っても声に出して伝える。意識づけを高める

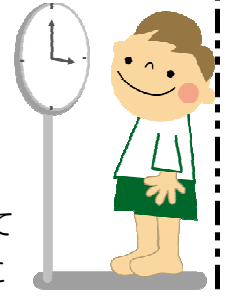
### 興味・関心



- ・実物を見せるなど、子どもの興味をそそる教材を用意する
- ・1回に呈示する学習量は多すぎないようにする
- ・取り組み方が「わかる」学習内容にする
- ・わからないところは教えてもらえる、聞いてもいい学級環境
- ・聞かせるだけでなく、見る・触る・嗅ぐなどほかの器官にも訴える

⇒“楽しい！”“わかる！”をたくさん味わわせるような授業

## 「早期発見・早期支援？」



「早期発見・早期治療（療育）」ということばは、学齢期のお子さんよりも少し前の、乳幼児期のお子さんに使われることばとして知られています。ところが、学齢期においても“早期発見・早期支援”ということばに置き換えたなら、この概念は身近なことばになるのかもしれませんが。実は、この概念、脳の発達を背景としていることばなのです。

生まれたばかりの赤ちゃんの脳の重量は約350g、成人の平均重量は1300gです。体重のように、年々少しずつ重くなっていくのかと思いきや、2～3歳になるまでの間に1000gを超えてしまいます。この急激な重量の増加は、神経細胞が増えるからではなく、神経と神経をつなぐネットワークが網の目状に張り巡らされていくためなのです。そしてこのネットワークは5歳にしてすでに完成します。それから後は、使用される経路は残り、使用されない経路は消えていくという、神経の剪定（せんてい）と呼ばれる現象が起こるようになります。この剪定が終了するのが10歳前後。この剪定に伴って、神経間の伝達速度は飛躍的に速くなり、人間の思考や運動がスムーズになっていきます。

また、低年齢期の脳は、ひとつの神経細胞がダメージを受けても、すぐにバイパスが形成可能になるというダメージに対する高い代償性を持っています。このような高い代償性は、5歳を過ぎると失われ、10歳を過ぎると成人との差がなくなると言われています。それでも中学生くらいまでは成人より高い代償能力が保たれています。

このような脳科学の知見から、「早期発見・早期治療」の概念は生まれました。脳の発達と代償性を考えると、より早い時期に発達の偏りや気になる部分を見つけることが、使用すべき経路を残すこと・高い代償性に支えられることにもなり、障害からの大きな回復や軽症化が可能になります。年齢が大きくなればなるほど、適切な剪定とバイパス作りは困難になっていきます。

そのため、なるべく早い時期に“発見”し、それに応じた“支援”を始めていくことが、子どもの発達を促し、二次障害につながることを防ぐことにもなります。

（文責 朝倉知香）



## 巡回相談のご案内

特別支援教育担当の心理士・研究主事などが、授業観察および聞き取り、ときには知能（発達）検査などを通して、発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約→情報共有→日程調整→巡回訪問→（状況により継続相談）

特別支援教育担当： TEL 664-1615（直通）